

川内原発事故↓沿岸の汚染拡散深刻

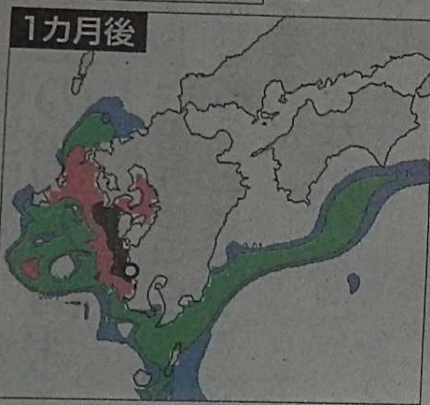
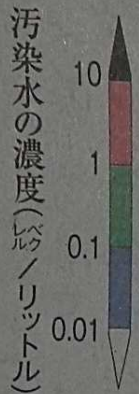
九大 福島と同規模で予測

川内原発で重大事故が起これると、海に流出した放射性物質が海流に乗って日本各地の沿岸部を広く汚染するというシミュレーション

結果を九州大がまとめた。とくに内海の有明海に入り込むと長期間とどまると予測している。

九大応用力学研究所の広

川内原発汚染水、海への拡散予測
2011年3月11日に福島第一原発と同規模の事故があったと想定
(九州大応用力学研究所の予測)



瀬直毅教授(海洋物理学)は、川内原発で福島第一事故と同規模の事故が起きたと想定。川内1、2号機と放射能漏れを起こした福島第一1〜3号機の出力がほぼ同じのため、海に出る放射性物質質量も同程度の10ベダ(ベダは1千兆)ベクレルと仮定。1カ月かけて海に漏れたとした。

2011年3月11日の気象・海流データで計算すると、放射性物質の濃度は、川内原発近くの海で1カ月

にわたって1辺あたり200辺を超え、沖合15キロでも60辺に達した。有明海では2カ月後に最大5辺を記録。その後も半年近く1辺

ほどの濃度が続いた。さらに放射性物質は対馬海流に乗って北上。長崎市

沖で1カ月半後に13辺、2カ月半後に博多沖で1・5

辺、3カ月後には北九州や

山口県下関市沖の響灘で1辺を超えた。一部は韓国沿岸に達するほか、南側に運ばれた分は黒潮に乗って太平洋を北上、鹿児島から四国、近畿沖の幅広い範囲に広がった。

福島事故では、放射性物質が黒潮に乗って比較的早い段階で太平洋に拡散したとの計算結果を海洋研究開発機構が発表。東京電力による海水の調査では、事故

2カ月後、福島第一原発近くの海で5〜80辺、数十キロ離れた茨城、福島、宮城の各県沖で5〜20辺だった。

福島沖は今も試験操作が続き、本格的な漁業再開には至っていない。

広瀬教授は「川内原発は対馬海流と黒潮の分岐点に近く、事故時の沿岸部への影響は福島第一よりはるかに大きい」と話す。

(東山正宣)